

模倣の共同体

BY しゅんぺー

ブラックブラザーズに誘われて行った東京で行われた奨学金のローン化に反対する大集会はあらゆる大学において現在進行中である知の探求の放棄に対して、多様な思考形態の触発の場であったと同時に、会場との応答を繰り返す中でさらなる問いかけが駆け巡る場でもあったことは間違いない。そもそもこの集会の発端は、学術支援機構が行おうとしている奨学金滞納者のブラックリスト化に対して疑問を持ち続けることを捨てなかった「ブラックリストの会in東京」のメンバーが主催であったのだが、そこで発言されたのは総じて大学という知のフィールドの在り方を問い直すことに焦点をあてていた。

集会の中で提起されたいくつかの事で今思い浮かぶのを適当に並べると、大学に蔓延する新自由主義とあらゆるものを共有する場である大学が相容れないものであること、学生の声に対し大学はもはや応答責任を投げ出していること、大学はデパートではないこと、などであったと思う。(ダイジェストではあるがYoutubeにもアップされているので気になる方はそちらで確認してほしい。)

そしてルー大生たち三人は、ミニ座談会と表して経緯を説明しながらルー大占拠のことを各々自由に話した。御飯がいかにおいしかったとか、昼寝するには最高だったとか、風が強くてテントが飛んだとか…ルー大生の提起の中で重要だった事は、ルー大占拠は模倣であり特に新自由主義に抗するグローバルな運動に強く影響を受けたのはもちろんだけれども、沖縄の反基地運動の文脈も非常に大切な位置を占めていた、と帝都東京で表明したことではないのか？とひそかに妄想している。

模倣の表明。これは分断されているものを紡ぎなおす何かを有していやしないか。それは沖縄と本土かもしれないし、基地とネオリベラリズムかもしれないし、思いもつかない何かと何かかもしれない。高江、辺野古、スゴ+ノモ、ニュースクール、反G8、1999シアトル、フランスゼネスト…人が集まると何を模倣しているかもわからない中で模倣し続けることが繰り返される。そこにはひょんなところから共同体の出現という応答を紡ぎ出す力が宿っているのだ。それが今回の集会に参加できたこととして現れたのは何よりの喜びである。

